

ブランソンのショージ・タブチのショウを見てきましょう。

2008, May 24,25



Missouri State ぐるっと一周。

メモリアル・デイ。久しぶりの三連休ということで、アメリカの田舎町ではあるが最近町おこしでここに芸術村ができ、それが大発展をしている。そこには数十ものファミリーシアターがあり、そのなかでももっとも人気があるというのが、日本人のショージ・タブチのショウということで、これをアメリカにいるうちに何とかみたいと思い、計画。

三連休ということで、当初は三日間の予定。第1日目はこのブランソンを、そして、2日目には、St. Louis を尋ねる一人旅の予定であった。同僚の田中氏が St. Louis が始めてということで、昔、インディアナにいたころここを尋ねたことがあるが、もう一度、アメリカ・フロンティアの発祥の地 St. Louis を楽しんでくれることにしていた。ところが、一週間前になり、急に出張が入ったということで、二日にしてくれとのこと。サラリーマンの宿命といえばそれまでだが、まあ、ここは何とか腹を納めて、その代わり、予定を変更し、三日分を何とか二日でドライブしようと、今回はすこし無理な工程のドライブとなった。

当初は、土曜日の出発の日は雨が降ったり止んだりの予想で、これなら何とか無事にカンザスを抜けることができるだろうと気を緩めていたら、前日の予想で、カンザス辺りは

サンダーストームということ。これは、雨の中のドライブになるかと覚悟し、すこし早めの出発とした。運転は、日本でドライブしまくりの田中さん。性格はいたって几帳面。仕事でも、私生活でも正確無比のところがあるが、なんとこれがスピードマニア。例のネズミ捕り対策のレーザーセンサーをつけているということで、随分大胆に飛ばすんです。もっとも、小生の場合はもう随分視力が落ちて、飛ばすよりもユックリと景色を楽しむというドライブですから、これが安全をかねている

といえば、安全運転を心がけているということにもなるんです。ということで、運転は田中さん。わたしは助手席でナビの子守をしながらの道案内ということになりました。疲れれば、適当に運転を交代すればよいということで、この日のドライブは一揆にカンザスシティを走りすぎてしまうほどの早い行程。途中、インター



ステーツ I-29 を走っていたら、横に、ATV を引っ張っている車がある。ここは職業柄、写真を撮らないわけには行かない。この ATV というのは、アメリカ人が馬の変わりに乗り回している、四輪バイクとっていただきたい。どんな地形でも乗り越えていけるというのがこの名前の由来である。その ATV のシートを当社が生産しているのだ。アメリカの市場の七割以上を生産しているので、まあ、こうして、町なかでこの車を見たら、まず、私たちが作っているシートを搭載しているといっても過言ではないだろう。というわけで、まず、その車のメーカーをみて、それから、どんな形のシートかというのを判別する。田中さんはもともと、こうした製品の開発をしているので、そのシートの開発の由来ばかりでなく、ATV そのものについても見識が深い。この話がまた楽しい。

そのシートのクッションを作っているのが私の職場。というわけで、こうしてドライブにでて、町中で自分たちの製品を目にすると、直ぐにそのオーナーと知り合いのような気持ちになるから不思議。高速道路ということで、窓から手を振ったりして御互いの意思を通じ、アクセルを吹かすのである。

行程が長いということで、今回はもっぱらインターステーツと、ハイウェイを利用。そんなわけで、随分と早く、カンザス・シティに到着。空はどんよりと雲っていたが、雨が落ちてくるほどではなく、一安心。しかし、さすが、カンザスの都心の摩天楼の上には霏が掛かっている。雲のなかの世界である。そんなダウントウンをぐるっと周回して、インターステーツ 71 から、ハイウェイ 7 に入る。ここからは、レゾート地のオザーク湖辺りに向う車が多い。なぜか、ここに Clinton という町がある。古い町だ。大統領のクリントンが出たのは、アーカンソーの Hot Springs であるが、なにか関連はあるのだろうか。ここから 13 号線に入り、ミズーリ州を一揆に南に下る。このあたり、川を堰きとめてできた湖の入り江が四方八方に伸びていて幾つもの橋を渡る。水がどんよりとして、水かさが多いのは最近の大雨によるものだろう。昼近くに Collins という町につく。この町、54 号線

と交差しているので、そこそこの町かと思い、昼食をとる予定でいたら、なんと、あるのはレストランが一軒だけ。時間も時間だっただけにやたらと混んでいる。これでは、時間がもったいないということで、次の町 **Bolivar** まで足を伸ばす。ここは、ハイウェイからすこし入ったところにある町であるが、なかなか歴史を感じさせてくれる町だった。例により、町の真ん中には立派なコートハウスがあり、ここがロータリーになっている。ぐる



Bolivar の町のコートハウス

りとこれを巡り、車の窓から写真を撮ってもたもたしていたら、なんと目の前にパトカー。よそ者たちが不信な行動をしていると勘ぐられては大変。おとなしく、中華バツフェに入る。まあそれにしても、とにかく驚くことはこの広いアメリカ、どこに行ってもこうした中華料理のお店が必ずあるということだ。それだけ、アメリカ中に中国料理が普及し、中国人が定着しているということか。そのしたたかさに参ってしまう。でも、このお店はなんとなく、韓国人

が経営している雰囲気。壁に掲げられていた装飾品が韓国のものがかなり多かった。種類はすくなかったが、この田舎町で中国料理を楽しむことができただけでもありがたい。

目的地のブランソンまでは、ここから二時間程度。ショーの予約は 7 時半。これなら十分に時間に余裕があると判断。この日のこれからの予定を変更。スプリングフィールドという町には、大きな鍾乳洞がある。ここには一度入ったことがあるが、この鍾乳洞は車中で探索できるということでアメリカではとても人気のあるケーブの一つ。田中さんには是非紹介したいということで、ここに立ち寄り、そのあと、明日いく予定だった、**Mansfield** の **Laura Ingalls** の博物館を訪ね、それから、ブランソンにいくことにした。十分に時間の余裕はあるはずだ、との目算。だが、これが大間違いだった。それがなにかは、あとでの話し。



このファンタスティックケーブは、スプリングフィールドの郊外の小高い丘の上にある。ここはア

Fantastic Cave これが地球の歴史だ。

メリカでも有数の有名なケーブ。とにかく、ケーブの中をトレーラーで案内してくれる。アメリカ中には、ケーブの学会まであり、あまた多くのケーブの中でも、こうして歩かず



こうして、車で探索できる。

に地球の歴史規模での自然を楽しめるのはアメリカではここだけ。世界中でも四つしかないそうだ。そんなわけで年寄りでも、また、ヨチヨチ歩きの子供でも家族揃って楽しめるというのがうたい文句。この洞穴、1862年にある農夫によって、というより、正確にはその彼がつれていた犬が見つけたとのこと。その数年の後に、12人の女性探検家達が入り、今日の大スケールの洞穴となったとのこと。今でもこの洞穴には地下水が流れてい

てこれを汲み上げているらしい。地表からは125フィートあり、天井からは雫が絶えず落ちていて、今でも鍾乳洞の塔は成長を続けている。長さが一メートル以上の柱が何本もあり、なかには、数メートルに達している立派なものがある。こうした柱の一つ一つが数万年、否、それ以上の年月を経て形作られたもので、それを眼前に見ていると、その長い時間軸の物凄さに驚愕する。自然の力の偉大なこと。

前回訪問したときは、冬で、しかも、朝一番の見学だったので、客も少なく、随分と早く一回りしたような気がしたが、今回は、トレーラーに一杯の人。しかも、数十人乗りのトレーラーが数台洞穴の中に順次入ってくるほどの賑わい。その人気の高さがよく分る。それだけに、説明が丁寧。アメリカではこうした自然の造詣を楽しむのは、単なる目でみて楽しむというよりも、かなり専門的なことを詳しくガイドしてくれるというのが常識のようだ。洞穴のできた歴史、仕組み、そして、これまでのこの洞穴が果たした役割など、ベテランガイドが滑らかな口調で話してくれる。これを完全に聞き取れたらどんなにか楽しいのだろうか、ちょっとだけ悔しい思い。アットという間の1時間。そんなわけで、思わぬ長居となった。

でも、まだ時間は十分あると、今度は、日本でもお馴染み、ローラ・インガルスが「大草原の小さな家」を執筆したという町、Mansfield に



「大草原の小さな家」の作家、Laura Ingalls の博物館。

向う。40mile ほど東にある町だ。ここも一度、一昨年尋ねたことがあるが、その時は年末休暇中だったので、今回は、なんととしてでも、見学をしたいと計画。当初は、2 日目に立ち寄るつもりだったが、この日が日曜ということで、朝は閉館。なら、土曜日にと、調整したわけ。ファンタスティックケープで思わぬ時間を取られたことで、着いたのが四時半。でも、駐車場には車もとまっていたので何とか間に合ったようだ。博物館に入りチケットを購入しようとする、係員の人、「もう、閉館まで 30 分しかない。とても全部は見られないので、ここの展示室なら入ってもよい。入場料は要らないよ。」という。なるほどなるほど。ちょっと通りすがりにここに寄ったなんていうのは、少々虫が良すぎるというわけか。ここを尋ねてくるなら、じっくりと時間をかけて、本当にローラ・インガルスを研究したくて来たというような人しか見る価値がないのよ、といわれた感じ。さもありなん。アメリカの博物館にはそうした趣のあるところが多い。表面づらだけをさっと見て、私、あそこもここも見てきたのよなんて自慢げにいう、東洋のどこかの人種には、到底、理解できないものの考え方のような気がした。反省します。でも、やっぱり、玄関で記念の写真を撮らせていただきました。



Laura Ingals の博物館の前で、ご機嫌。

Branson

そして、いよいよ、ブランソン入り。この町、

ブランソンは、スプリングフィールドの南、オザークの山々の麓に位置します。ここは現在、「音楽の殿堂」として、ナッシュビルを凌ぐ急成長ぶりを見せ、アメリカ観光産業のなかで最も注目を浴びているのです。1960 年、2 つの家族がオザーク湖畔でファミリーリゾート事業を開始したが、この地域のオザーク開拓者の誠実・勤勉な精神性と雄大な自然美があいまって家族のビジネスは大成功を納めることになりました。また同じく 1960 年、メイブ・ブラザースの 5 人がブランソンの湖畔、タニーコモでカントリーミュージックショーを開催し、音楽産業急成長のきっかけとなったのです。ミズーリに脈々と受け継がれるフロンティア精神、それは現在もビジネスの基本的なポリシーに生き、無数のブランソン、サクセス・ストーリーを作り出しています。

こんな風に紹介されている町です。そのサクセス・ストーリーの一つに日本人の音楽家

ショージ・タブチがいます。彼は、フィドラーの有名な奏者ですが、いまでは、この町に個人の劇場を持っており、ここで、毎日、ショーを楽しませてくれているというわけです。アメリカに何年もいる人たちは、誰もが、一度はここで、彼のショーを楽しんでくるといいと推薦します。私もアメリカ生活四年になりますから、もう、そろそろ、こうしたイベントを他人に推薦する側に立てるかなと思い、今回、思い切ってここでショーを楽しむことにしたわけです。そこで、チケットの予約も自分で電話をし、クレジットで購入する手配をしました。注文が本人であるかどうかの確認の電話があったりでちょっと苦勞もしましたが、どうやら無事、チケット



お世話になったツーリストセンター

の予約もでき、その要領も体験できたわけ。さあ、いよいよ、そのチケットを受け取るということで、ブランソンにあるツーリストセンターに。ここは、ブランソンに入り最初の出口と案内がある。ナビを片手に、緊張の面持ちでこのセンターを見つけ、中に入る。さてさてうまく英語が通ずるか。驚いたことにこのセンターには、カウンターが十近くもあり、ここで係員がてきぱきと処理している。私が入るとまたま空いたカウンターから目配せで、いらっしゃいという感じ。早速、チケ

ットの予約を確認してくれという。ラストネームを尋ねられたので、勿論、「Suzuki」と応えたが、彼らには日本の名前には馴染みがない。アルファベットで言えという。今度はこちらの発音が悪い。大体こんな具合でトラブルが発生するのだが、そのカウンターの直ぐ後ろにいたおばさん。直ぐに「Mr. Suzuki. OK. Here is your ticket.」という・・・というより、そう言ったのだろうと勝手に解釈。直ぐにチケットの入った袋を出してきてくれた。これで、無事、チケットが手に入った。きけば、真ん中の一等席を確保しておきましたという。



トイレの中のソファで寛ぐ田中さん。

「うそっ?」と疑うほど。

なかなかのサービス精神。これはありがたいと、気分をよくする。というわけで、直ぐ湧きにあった土産物屋、というより、ここはガソリンスタンドのよこにあるお店という感じ、ここで、なにか記念にと思い、例により、バッチなどを購入。これがまた、安い。というより、どこに行っても観光地だからといってむやみに高いというわけではない。日本なら、観光地では値段が倍になり、苦い思いをして買ってくるところだが、こちらはたまに来るお客さんというより、また、来て欲しいからか、決して土産物が高いというようなことはしない。これはホテルでも、土産物屋でも、また、ガソリンスタンドにある土産物のコーナーでもどこでも同じ。見習いたいサービス精神である。夜が遅くなるだろうと思い、先にチェックインのためにホテルに向う。まだ 1 時間ある。が、チケットを見たら、45 分前に入場とある。まあ、ぎりぎりでもショーに間に合えば良いだろう。それなら、その前にブランソンの町なかを見物するかと安易に、まず、モーター



ルの直ぐそばに目的のモーターの看板がたっている。モーターは見つかったが、高速を次の出口まで行かなくてはならない。高速は無料だから、どこまで行ってもいいのだが、いよいよ時間が残り少なくなってきて、やや、気に焦り。次のインターまではまだかなり距離がありそう。と、なんと、直ぐそこに、左折のために中央分離帯が切れている。しめた、ここで U-ターンをしちまえと、いっ

た調子で、前後に車のいないこと、勿論、パトカーがいないことを確認して、ハイウェイのなかで U-ターン。こうして、無事、モーターについた。チェックインを済ませて、直ぐにブランソンに戻る。ところが、ブランソンに入りびっくり仰天。なんとここが大渋滞。それもそのはず、ここにこの界限から沢山の人がショーを見に来ているわけである。しかも、どこのショーも大体同じ時刻に始まることは間違いない。というわけで、ブランソンの町中見物どころではなくなった。ここは、ツーリストセンターで手に入れた地図を見ながら、近道をして、どうやら無事、30 分前に到着。駐車場は、小さな野球場くらいある。観光バスからは老人ツアーの人たちがゾクゾクやってくる。中に入ると土産物屋さんがあり、大賑わい。なるほど、45 分前というのは、ショーの前に買い物をする時間が必要ですよというわけである。とりあえず、品定めだけ。

1000 席以上あるような、とても立派な劇場。もっとも有名なのは、ここのトイレ。一見の価値があるというので、まずはトイレに。行ってびっくり。その名に恥じず、壁にモザイク調のデコレーションが施され、大理石でできた便器。トイレの中にソファさえ置いてある。まあ、とにかくトイレが応接間の感じ。そこでこれも珍しかろうと、話のたねに記念写真。

いよいよショー。その演出がなかなかいい。お客さんが全員席に着く前に、若い団員たちだろう、みんながピエロの格好をしてパントマイムを始めた。客席の中にも入って演技をしている。それまでざわざわしていた客席から笑いが起こり、一同が静かに席に着く。と、最後に二人のピエロがどちらの芸が素晴らしかったか、客の拍手で決着しようと、ワーッと雰囲気盛り上げる。もう、こうなると、開演はいまか今かの絶好調に達する。我々の席は、センターで紹介されたとおり、H209 と H210。ここは、前から八列目のセンターだ。思わず、拍手も他人よりも大きく、手を頭の上にあげて興奮状態。

そして、いよいよショーの始まり。ショージ・タブチの登場である。フィドラー、つまり、バイオリンを開場一杯に響き渡らせる。見事な演奏である。彼は、アメリカのバイオリンのコンテストでよい成績を収めて、こちらに定住するようになったとか。ショーは彼のフィドラーの演奏もさることながら、その語りがなかなか楽しい。丁寧な英語。決して流暢とはいえないが、我々にもよく分る英語だ。思うに、こうした劇場に来ているのは実に老人、つまり、リタイアした人が多い。そんな人には流暢な英語よりも、丁寧な言葉が受けるのであろう。これも彼の人気の秘訣の一つなのかもしれない。勿論、フィドラーの演奏は本格的なバイオリンの腕前だから、聴いていて楽しい。語りのなかで、お客さんがどこから来たのか、挙手をしてもらう。



「ルイジアナの人？」と聞けば、客席に沢山の人が手を上げる。「ルイジア

ショージ・タブチの熱演



ナのどこ？」と聞く。すると客から「どこどこだ」と返事がくるが、そんな町、聞いたことがないとショージが応える。そのあと、私は、ルイジアナの北の〇〇という町で生活していた。北と南はアクセントが違い、南の方言はよく分らないといって、客を笑わせる。「ハワイから来た人？」と聞く。とこれがまた沢山いる。あそこは素晴らしい天国だ。サーフィンができ、釣りができ、・・・といって持ち上げる。そして、それを意識してか、舞台では、

ハワイアン演奏と、フラダンスが始まる。こうなると、ハワイから来ている人は気分最高。そこで、タブチが、団員はこれを練習するために何ヶ月もハワイから来た指導員について本格的に訓練するのだと説明。確かに、あのフラダンスの腰の振り方は見事。訓練であれだけできるものかと感心した次第。しかも、それが美人だけだからなおさらだ。ちょっとこちらを向いて、「にこっ」としてくれたりすると、なにか自分だけのために踊ってくれているような気分になる。思うのは勝手ですから。中休みがあり、一端休憩の時間にタブチが客席に下りてきて、観客と親しく会話を始める。そんな時、田中さんがやおら、席を立ち、彼のところにつかつかと近づいていき、突然の握手。凄いいっ。タブチと握手して、親しげに話しをしているではないか。残念ながら、写真は電池切れ。でも、彼と話をきて、興奮気味の田中さんによれば、タブチは、大阪の桃山学院大学出身とのこと。

舞台の上からの彼の自己紹介があった。スズキメソッドでバイオリンをはじめ、アメリカにきて、こちらに定住するようになったが、最初は時給五ドルの皿洗いから始めたなどといった。

舞台は、いろいろなテーマが設定されていて、ウェスタン、カントリーミュージック、ジャズ、など、テキサスから来た人、ルイジアナから来たひと、などなど、それぞれの地方の人たちへのサービスをこめて演出されている。そのあと、ブロードウェイのヒットを年代ごとに紹介してくれる。聞いたことのある曲を見事にフィドラーで演奏してくれ、後ろではイルミネーションが見事な照明のしたで、若い団員が元気一杯踊っている。広い舞台が全く狭く感じられるほど、楽しい演技が続く。日本の音楽を紹介する場面もあり、太鼓が演技された。大太鼓は人間の背丈ほどもあり、これを上手にはたく。よく訓練されている。こんなものを 1 人が何役もこなすので、舞台練習もさぞかし大変だろうと思う。

演技をみているなかで楽しいのが、素晴らしいイルミネーション。こうした舞台裏での裏方にも随分手が込んでいる。彼の紹介では、ここのイルミネーション、バルセロナのオリンピックの演出をした人、舞台装置はニューヨークやカリフォルニアから一流の技術者を呼んできているそう。また、舞台衣装をデザインしているのはミスインターナショナルコンテストの衣装デザインをしていた人とか。さらに、ここの舞台での見所は、空中飛雄の演技。これはピーターパンの舞台よりも先で、元祖なのだそう。ある場面では、天井から舞台一杯にシャボン玉が落ちて来る。このために天井にいる裏方は、真っ赤になって息つく間もないくらいにシャボン玉を吹きまくっているの



だと、タブチがそのまねをする。その姿にみんなが喝采。そして最後には舞台に猛烈な爆竹のようなものが破裂し、気分は絶頂。虹のイルミネーションに照らされて幕が降りるというわけ。アットという間の二時間でした。



そして、気分よくみやげ物を買ひ、モーテルへの帰路につく。が、これがまた大変な渋滞。アメリカにきて、これほどの渋滞はこれまで経験したことがない。慣れない町で迂回路もままならないが、もう、11時近い。地図では、なんと山越えの雰囲気であるが、急がば回れと山のなかの抜け道に挑戦。ところがこれが全く街灯のない山道。恐る恐る度胸をすえて走ること、およそ30分。なんとかモーテルに辿りつく。この日は、これでぐったり状態。明日のためにシャワーも浴びず、ベッドにボタン。

この日の走行距離は、590mile だったそうです。ということは、殆ど1000キロ。ご苦労さんでした田中さん。

Lincoln ----→ Nebraska-city ---→ Kansas ---→ Harrisonville
----→ Clinton ---→ Collins ----. Springfield --→ Mansfield
----→ Branson

2 日目 ユニオン・カバードブリッジ

この日は、当初、St. Louis でゲートアーチを訪ねる予定だったが、同行の田中さんの時間がないというので、急遽予定を変更して、コースを短絡、プランソンから、ミズーリ州の北東部にあるユニオン・カバードブリッジを訪ねることにした。カバード・ブリッジについては、インディアナにいた時代に、インディアナ州の北部に沢山のカバード・ブリッジがあるということで、その幾つかを尋ねたことがある。かつてアメリカ中で一世を風靡したこの形式の橋、つまり、屋根付の橋は、いまでも東海岸から西海岸にかけて随分と残っているようである。カバード・ブリッジ学会というものもあるそうで、建築学の上からも様々な研究がなされている。しかし、なんといっても、この橋が有名になったのは、アメリカでベストセラーになった「マディソン郡の橋」という小説の舞台が、アイオアの州都、デモイネの近く、マディソン郡にかかっているカバード・ブリッジ。ここを舞台に大人のロマン小説が描かれ、それが映画化されたので、一躍有名になった。そのマディソン郡の橋は、ネブラスカに来て直ぐに尋ねた。こんな調子でカバード・ブリッジには、なにかロマンが漂っているのである。そして、このカバード・ブリッジが、このミズーリ州にも四つほどのこっているのだそう。その一つがユニオン橋。プランソンからは 200mile くらい離れている。

この日、空はどん曇であったが、幸い雨ではない。谷あいの町プランソンを 7 時半に出発。暫く、オザークの森の中、起伏に飛んだ道を走る。普段、直線の道路しか走っていない田中さんは、このカーブ、そして、アップアンドダウンの山道に、スピードを落とさず、遠心力でグーと沈み込むその感覚を肌で感じて楽しんでいる様子。ミズーリ州の南東は、マークトウェンに因んだナショナルフォレストがあり、こんな道が延々と続いている。アメリカの田舎道は、道路を作るのに天然



の地形をそのまま道路に使う。だから、山岳道路あり、崖あり、くねくねの道ありで、ハンドル捌きを存分に楽しむことができる。合理的といえは合理的であるが、とにかく広いアメリカ、こんな道を作っても、その道を通る人はごくごく僅か。でもそれが生活道路になっているというので、舗装だけはしっかりしている。だから、こんな道を自分の車だけが走っているときは、まるで、その道が自分の車のためにだけ作られているような錯覚になる。これが、また最高のドライブ気分。時には、スキーのジャンプ台から飛び出すような気分、そして、ナスカーのドライバ

一が体をかしげてコーナーワークを、また、あるときには、アクセルの駆動を伝えてくれる振動を楽しむかのように、制限速度を越えて、ちょっぴりスピードマニアになる。こんな調子で、朝の眠気を覚ましながらか、昨日の Mansfield まで山道をつきぬける。ここからは、回りの風景が一変し、森が少なくなり草原の広がった平原となる。そんな中に、Hartville という町がある。



これがメモリアルディの光景

38号線と5号線の交差している小さな町であるが、ここで、大変なものをみた。普段、田舎道をドライブしていると町から町までは本当に何もなない農村風景で、大体、65mile くらいで走る。そして、次の町に近づくと、55mile くらいの速度制限になる。と、大体は町外れに墓地があるのだ。これが通常のパターン。そして、この Hartville の町にも、町外れに墓

地があつたが、そこが、大変な賑わい。墓地の周りには星条旗が何十本

も風に揺れて旗めいている。みればどの墓にも色とりどりの花束が飾られ、これが墓地一杯に広がり、見事な光景。最初は、いやに花が多いな、アメリカの人たちはよくこうして墓の面倒を見ているよ、くらいの感覚であつたが、実は、この花束は、メモリアルディのために飾られた花だということが分つた。Lebanon という町でガソリンを補給しているときに、やっぱりその直ぐ先に墓地があり、ここにも見事に花が飾られていた。その時に、このメモリアルディというのが何かということになった。まあ、皆さんはよくご存知のことと思いますが、私は、記念日ということはわかるが、それが何の記念日なのかを知らなかつたのです。早速、勉強熱心、探究心の結晶、学者エンジニアの田中さんが辞書で、その場で調べてくれたところでは、このメモリアルデイというのは、「戦没者記念日」なのだそう。なるほど、それなら、星条旗も分るし、一度にこれだけの人が集まるのもよく分る。日本で言えば、さしずめ、終戦記念日、靖国神社の戦没者慰霊の日というところか。これで納得。それからのドライブの途中、あちこちでこの花束の飾られた墓地を体験することになる。

ミズーリ州の州都は Jefferson City。勿論、大統領の Thomas Jefferson にちなんでつけられた名前である。なぜ Jefferson かつて、それは、彼がミシシッピー川から西の地域がすべてルイジアナと呼ばれていた時代に、この地をフランスから譲り受け、ここをアメリカ合衆国とし、西洋人の開拓者を入植させ、アメリカ大発展の基盤を築いたからである。というわけで、とにかくミズーリ州がアメリカのフロンティアの出発点なのである。そんな名誉の残っている州の州都が Jefferson であるのは、「Lewis & Clark 探検隊」のファンである私にはとても親しく感じられるのである。こののステートハウスは、ホワイトハウスに似ているし、町はずれを流れるミズ

ーリ川には立派な橋が掛かっている。この橋を渡ると直ぐ崖が出てくる。その崖の入り口には、Summit Drive という道があり崖の上まで繋がっていた。そして、崖の上には立派な館がまるで、下のハイウェイを通る車を監視しているかのように聳えたっていた。かつては、この崖の上からインディアン達も Lewis と Clark たちを監視しながら眺めていたのかもしれない。

そして、ここから、カウンティハイウェイを北に走る。Fulton という町のあたり、ここは 70mile の制限速度。田中さん、気分良く、7 マイルオーバーで走っていたと後で冷や汗。それ



もそのはず、我々が追い抜いぬこうとした車にホンダの ATV が積まれていたので、この写真を撮ろうとスピード緩めた。と、なんと、我々の車のその直ぐあとに何時の間にかパトカーがずっとつけてきていたらしい。我々がスピードを緩め、走行車線に戻ったところ、直ぐにこれを追い抜いていった。どうみても我々の車を監視していたような気がする。「おっ。あぶねえ」と、田中さん。

このおかげで助かりました。ありがとう。

仕事熱心で写真を撮ろうとして、スピード違反を免れたという一件でした。

I-35 から、I-70 を横切り、今度は、Mexico という町に到着。Lebanon といい、Mexico いい、ちょっと南には Cuba というところがある。こんな風に、アメリカには海外の国の名前がついた街があちこちにある。ここに入植して母国の名前を市の名前にしたのだろう。つくづくアメリカという国の懐の深さを感じるが、残念ながら、今だ、日本のふるさとの名前をつけた町を経験したことがない。Little Tokyo というのはあるが、田舎に Kyoto とか Osaka とか Nara なんという名前があれば楽しいのだが。こんな町の名前がないのは、日本がこの国の文化といかに異質なものを持っているかという証のような気がするが、いかがでしょうか。そんなことを考えながら、この Mexico という町で、メキシコ料理でも食べようかとメキシコ料理店を探した。ナビで具合良く見つけた。指示通りのその場所に着いたが、それらしきものが見当たらない。仕方なく、ここも、したたか中国料理のbuffetに入る。ちょっとだけ時間が早かったのが幸い。なんと、このお店、我々のあとからゾクゾクとアメリカ人の家族が入ってくるのだ。おそらくお墓参りのあとの一族揃っての昼食会というところか。随分と賑やかな雰囲気となった。お店は大繁盛である。それにしてもアメリカ中、どんな田舎にも中国料理。実に、これだけ中国料理がアメリカ人に受け入れられているということかと、改めて感心、感心。確かに、中国料理を食べ放題食べて、フルーツも沢山用意されているし、デザートもケーキやらアイスクリームやら、とにかく

腹いっぱい食べて、十ドル程度。大食漢のアメリカ人にとっては、こんなに嬉しい食事はないのかもしれない。

お腹が一杯になったところで、さあ、いよいよ **Union Covered Bridge** である。ここから僅かの距離であるが、ブリッジのあるところは田舎の、また、その田舎なのだ。アメリカでは、こうした名所の案内も、本当にごくごく質素。こぢんまりと、申し訳程度に小さな看板がたっているに過ぎない。ようは、こうした場所に来る人は、その下準備を十分にしてくてください、というわけだ。だから、よほど興味のある人たちしかやってこないし、文化遺産もあらされるようなことは少ないのだ。勿論、ナビは、田舎の細かなところまで探索できない。ここは、インターネットで調べた地図と、あるかないかわからないような看板を必死で探しながら行くのだ。こんな調子で運良く近くまで行き、ふと、案内の看板に目が止まった。こうなればしめたもの。あとは、その案内を頼りに走ればいい。こうして、人里



はなれたところにある Covered Bridge を無事発見することができ

これが、**Union Covered Bridge**。歴史を感じてください。

た。そこに着くとすでに二・三台の車が止まって橋を見学していた。今ある橋はすでに車が渡ることはできないが、なかなか立派なもの。建設は 1871 だそう。すでに 140 年近くたっている。この橋、ミズーリ州に現存する四つの Covered Bridge の一つなのだが、橋の構造が、ここ独特のもので、Burr-arch design というのだそう。長さが 125 フィート、幅が 17.5 フィートのもの。いつも Covered Bridge の話になると、どうして、Covered Bridge なのということになる。ここには、こんな説明があった。原文のままのほうが分るという方のために

Why a covered bridge? There are several reasons why communities began opting for covering their bridges. It kept the water out of the joints, where it might freeze during winter or cause rotting during the summer. Covering the bridge also strengthened the structure by making it more solid. The barnlike appearance of a covered bridge made it easier for farm animals to cross the river without becoming nervous. One unexpected result of covering bridges was that it provided a place for early entrepreneurs to advertise their products with signs painted or glued to the sides of the bridge, often without permission

と言うらしい。私のホームページにも紹介してありますので、もし、興味があればそちらも覗いてみてください。(<http://www1.odn.ne.jp/kentaurus/> Covered Bridge を尋ねて、ならびに、

うそのようで本当の話のところに、インディアナ時代の話しが掲載されています。)

この橋のすぐしたに、車の通ることのできる橋があるが、いまは増水してここの橋は冠水していた。深さはたいしたことはないが、橋のすぐ下の流がちょっとした滝になっていて、この滝に落ちる水の音に圧倒されて、この時期、ここをわたる車はない。橋の中には、ここに来た記念



下の道路の橋は冠水していた。

にとばかり、自分の名前をペンキで書き込んでいるようなものもあるが、それも極僅か。気分を害するほどのものではない。つまり、こんな田舎まで来る人に、そんないたずら書きをするような奴はいないというわけ。また、このような文化遺産を大体的に宣伝して、土産物屋を作ろうなんていう、そんなけちな発想はないというところか。そんなことを知っただけでも、ここに来た甲斐が十分あったような気分。

ミズーリ州にある Covered Bridge をみてご機嫌。本来なら、もう一つ ここから 150mile ほどいったところにも、橋があるのだが、ここは、車では直接行くことができず、公園の入り口から半 mile ほど歩いていかなければならない。というわけで、この日の日程から無理があり、次の目的地の Mormon Shrine というところを目指す。場所は、Cameron の北、Gallatine という町の近く。だが、ここがまたはつきりしない。インターネットで調べても詳しい案内がないのだ。でも、まあ、とにかく近くまで言って道を聞きながら行こうとたかをくくったのが大間違い。近くで道を聞いても、なかなか説明に埒が明かない。詳しく説明してくれているのだが、なんとなく、その場所は、祈るだけだよといっている。こちらはなんのことか分らない。どうも、我々はよそ者だし、あまり行ってほしくないような口ぶり。というわけで、30 分近く探しまわったが、どうしても見つからず、これを断念。後ろ髪を惹かれる思いで 136 号線を西に西にと帰途についた。ミズーリの農村地帯を横切り、I-29 に向う。途中 Stanberry という町の近くでは、小高い丘の上に風車が延々と続いている光景を見る。この辺り、絶えず一定方向から風が吹いているという証拠。しかも、その向きがなんと、南西なのである。ミズーリの北西部ということで、北風の通り道ネブラスカからはそう離れているとはおもえないが、ここでは、全く風の向きが違うのだ。つまり、北風はここまでやって来られないということか。その自然の摂理に驚愕。北風と南風が勢力争いをしているのだ。だから、この辺りにトルネードが発生するというわけ。この町の近くに Maryville というちょっとした町がある。ここには、当社のお得意様の川崎重工の工場がある。ガソリンスタンドでどこにあるか知っているかと聞いたら、良くぞ聞いてくれました

と、にこにこしながら、手振りで丁寧に教えてくれた。これでは、見に行かないわけにはいかない。ということで、その玄関までいって、ここまで来た証に写真を撮る。なんと、なんと、三連休の中日。車が二十台近くとまって、中に明かりがついている。つまり、仕事をしている人がいるというわけ。まあ、ワーカーホリック日本人だけだろうが、ちょっと仕事をしすぎではないですか、の思い。

この先の **Burlington** というほんとに小さな町を通った時のこと。ちょっとした工場があり、



町の看板には、**Home of Rocket** とあり、小さなロケットの模型が飾られていた。「えっ。何で」思ったが、結局分らず、これは、帰ってから早速調べなくてはと先を急ぐ。時間はすでに、7時を回っている。まだ、これから1時間半の行程。そして、**I-29** に乗る。ここまでくれば、ハイウェイ2に乗り、リンカーンまでまっしぐら。と安心していたら、ぽつりぽつりと雨が降ってきた。最初のうちは、汚れた車もこれで少しは綺麗になると冗談交じりにいていたが、そのうち、猛烈な雨と雷になり、まさしくサンダーストーム。遠く

こんなところに風車が・・・。

には稲光が夜空を引き裂くように落ちている。雨脚はひどくなり、横風が吹いてきて車は、視界がとてもわるく、前の車のテールランプがやっと見える程度。その車も徐行を始めている。なかには、途中にある立体交差の橋桁の下に車を止めて避難しているものもある。ハイウェイの上を川が流れるように水が溜まり始めている。そんな中をあとわずかということで、ネブラスカに入る。がなんと、ハイウェイ2に入り、雨宿りのため、レストランに入り腹ごしらえをしていたら、雨は止んでいる。アイオアのまだ遠くでは雷がなっているが、ネブラスカのほうは雲間が切れ、夕焼けだ。この天気の較差。アメリカの広さなのか。まあ、西と東では、100mileは離れている。日本で言えば、東京と静岡の天気だから、こんなことも普通なのかもしれない。

こうして、夕立のお出迎えを受け、そして、夕焼けを眺めての帰りとなったドライブでしたが、この日、620mile、二日間合わせて1,210mileの旅が無事終了しました。その殆どの間ハンドルを握ってくれた田中さん、本当にご苦労さんでした。でも、旅を旅先での出会いが楽しみということを再認識しただけでも、よかったではないですか。

Branson ----> Ava ----> Mansfield ----> Hartville ----> Lebanon

----> Camdenton ----> Jefferson City ----> Fulton ----> Kingdom City

----> Mexico --> Centralia ----> Union Covered Bridge --> Moberly

-----> Macon --> Chilicothe ----> Cameron ---> Gallatin --> Bethany

--> Stanberry -----> Maryville -----> Rock Port ----> Nebraska city

---> Lincoln